

## 3月20日 習志野ダウン症児者親の会と音楽で手をつなごうプロジェクト

## 習志野発！音楽で手をつなごうコンサートは大盛況



二つの会共催のコンサートを、習志野市の福祉拠点「ゆいまーる習志野」内の福祉交流スペースで開催しました。会員数60名を超える親の会活動の更なる活性化や、障がいのある人たちの発表の場をつくり、そこから様々なメッセージを発信していくことを目的としたものです。

当日は、主催者挨拶の後、コンサートの部では、習志野市で30年余り音楽・読み聞かせ・おもちゃ工作などの活動が続ける「むつみおもちゃ図書館」から18名の出演者が、器楽による演奏や歌（手話付き）を2曲披露。プロジェクトからの6名グループは器楽による演奏を4曲披露しました。スピーチの部では、ダウン症のある小3と中1の男子と成人の女性、きょうだい2名、合わせて

5名（一部代読）が堂々と発表しました。

最後は会場のみなさん全員で「上を向いて歩こう」など2曲を大合唱。当初100余り用意した席を追加するほどの盛況ぶりで、出演者を含め120名ほどの参加者で満員となった会場は熱気に溢れていました。【音楽で手をつなごうプロジェクト 代表：小林 紳一】



コンサート終演後、出演者・関係者が充実の笑顔で！

## 3月20日 福岡県北九州市でのシンポジウム

## 有志の実行委員会による新型出生前診断についてのシンポジウム



3月20日（日）にシンポジウム「誰もが生まれて生きる社会を目指して」を開催し、いのちについて考えました。古庄知己先生、中込さと子先生、長谷川知子先生、藤山節子さん（広島支部）、久米奈津雄さん（福岡支部）の豪華メンバーにご講演を頂きました。

医療者・助産師の先生からは以下のお話。妊婦さんが診断を受ける理由の多くは漠然とした不安によるものであり、時間をかけてじっくりカウンセリングを行うことによって受診の必要なしと取りやめる人がかなりいること。診断を受けても不安はなくなるならないこと。妊婦さんに完璧な子どもを産むことを期待しすぎている現状は問題であり、どんな子であってもみんなを出産を祝福する社会でありたいこと。ダウン症の人や出生前診断について正しい理解に基づ

かない誤った情報が流布しており、親のなかにもわが子を過小評価して成長の芽を摘んでいる場合があること。

保護者代表からは、成人のダウン症の人のなかには出生前診断が自分たちの命を否定するものであることをしっかりと理解し、それに対してノーと意思表示している人がいること、子やきょうだいに障害があっても幸せに生活していること、が語られました。

新型出生前診断カウンセリングにおいて、ダウン症の人についての具体的で正確な情報（人となり、暮らしぶり、社会的支援など）がきちんと提供され、そのうえで受診者が意思決定する体制が整備されることを切実に希望するとともに、いのちについての議論がもっと深まっていくことを願っています。

【実行委員：上角 智希】

関連事業はJDS埼玉浦和支部が追加になり計25カ所になりました。6・7月号に報告が続きます。